
ハイスクールD×D平和を望む少年

雨男氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D平和を望む少年

【NZコード】

N9892W

【作者名】

雨男氏

【あらすじ】

ハイスクールD×Dに転生した少年は望んだ平和が手には入るのか？

プロローグ（前書き）

感想意見、誤字脱字あつまつたらどりつれ

プロローグ

「始まりはいつも突然だった」

なーんてねーどうも、何か起きたら、知らない間に真っ白い部屋にいるんですけど何で? 」

確か俺は「コンビニでジャン を呼んでその後、え——————と何していたっけ? 」

「お前はコンビニで立ち読みした後、道を歩いていたらトラックに轢かれてその後、そのトラックの鉄骨の下敷きになつて死んだのじや」

「そうだ!! ヤンプ読んだ後家に帰つていたらトラックに轢かれたんだ!! 」

「それで「こははは」? 天国? いや俺そんないい」としてないから地獄? 」

「ほほほ。心配せんでもお前さんは天国にも地獄にも逝かん

「マジー! だつたら俺生き返れんの? てかわから聞いえてくる声は誰だよー! 」

「今さらか……まあよこワシはお前達が呼ぶ神それもこの世界の最高神、創造神じゃ
ちなみにお前とさせの世界では生き返れん、まつあつ言ひと別の世界に行つてもらひ」

「何で？ てか俺どこにでもこる普通の高校男子だぞ何で転生？

「それは、まだお前が死ぬはずではなかつたじや。それにお前の今的人生はあまりにも不憫だつたからの一

それで俺は行かない選択肢はないのか？

「ない……」

即答かよーもつここそつをと送つてくれ

「なんじゃ？ お約束の特典とかいらんのか？」

別に俺は普通に生きればそれでいいし

「それじゃワシがつまらん……特別にワシがお前の知識からいの

を選んでやるの！」

まで……それだと強くなつて平和に暮らせんじゃねいか……！

…………

「貴様の都合は知らんそれでは逝つてみよ！」

絶対今の字違つた……！

「いく所はハイスクールD×Dじやガンバ」

そういう瞬間俺の意識が消えた。

原作に入るまで少しかかりますあしからず
（前書き）

起きたらそこは・・・

「どうだよ！」は？

俺の意識が戻りあたりを見渡しそこは、木木木木だ。

「どうかの森か？」

そんなことを思いもう一度あたりを見渡す。

やっぱり木しかないな。

「ん？」

周りを見ていると俺の体に違和感があった。普通にしゃべれではいるが声が妙に高い、それに目線がいつもの半分ぐらいしかない。

「もしかして」

俺はある単純な結論に至つたそれは俺の体が小さくなっていることにそしてその予想は見事的中。

今の俺は大体4～5歳？ぐらいの子供になつていてる。

「確認は済みましたか？主」

不意に声がかけられた驚いて振り向くとそこにはいなかつたはずの（ビジネススーツを着た）女性がいた。見た目は20歳位だと思つ顔は綺麗に整つているがその瞳には何も写していないただ鏡のように俺が映つていて。身長は、高くモデルのようすらつとして長い黒髪が風になびいていた。

何故に？スース？

「誰だ？」

俺はまづ最初に一番疑問に思つたことを口にする。

「主が転生してきたときに一緒に送られた物です。私の役目は主の側に365日24時間いることです」

ヤバイ。何かヤバイ。まさか特典の一発目がこんなんだとわ。ん？待てよ。

「君はわざわざ自分のことを者ではなく物と言つたといつことより、このハイスクールD×Dの世界で言つ神器なのか？」

ハイスクール・ギア

「そうです。私は生きた神器。自分で考え自分で戦つ」とが出来ます

なるほど、だから彼女は物と言つたのか。

「ありがと次の質問なんだけど君はこの世界で言つ神器の強さはどうくらいだ？」

「はい私の強さは、神滅具の力を持つ神器と同等かそれ以上です」

彼女は表情を変えないまま言つたそれは俺のはるか予想を超えて。

「最後に君の名前を教えてくれ、それと、俺の特典についてもだ」

彼女は、小さく頷くと、どう見てもポケットに入らないだらうと言つ袋と手紙が出てきた。最初に俺は手紙を受け取り読む。

『やーこの手紙を無事読んだと云つことは転生に成功したようじやな。

それになんで体小さいかはのー、一度この世界に馴染ませないと
いけなかつたからぢやちなみにお主の年齢は五歳程じや赤ちゃんだと何かと不便だと思つての一様、体の成長は自由に変えれるよつこなつておる。

種族は元人間の悪魔じやからそのほうが何かと都合がいいかと思つての。

前置きが長くなつたがお主の力についてこれから説明するぞ。

身体能力は高くしてある身体能力で上位の天使、墮天使、悪魔と対等に戦えるほどじやちなみにお主には武の才能と殺人技能を与えたからの。

後、能力じやがあぬしには直死の魔眼、蒼の魔道書、ハ握剣を与えたからの力の使い方はお主の頭に直接入れたから理解できるはずじや。どれも神滅具並に強力じやから使い方には気おつけるのじや。直死の魔眼は何のリスクも為しに使えるから心配せんでよいぞ。

それにお主には魔力が全くないそのための魔道書なのじやがな、武器はそこの袋に入つておる。お主、人身が武器なのじやが役に立つと思い何個か送つたからの武器の説明は一番最初に触つた者のみ自動で分かるようになつておるからの最後に彼女には名前がないからお主がつけてやつてくれ。そしてこれを読んだら自動で前世の記憶が消えるからの一応この世界の知識に關しては残しておくからがんばるのジャー』

そう書いてあつた手紙を呼んだ後彼女に視線を向ける。どうやら待つてくれたようだじつと彼女の瞳が俺を捕らえている。

「この紙に書いているんだけど君に名前がないから今からつけようと思う何かいいのはない？」

「主が決めてくれるのでしたらなんでもいいです」

「何でもそれが一番困るんだよなー俺ネーミングセンスないし。どうじょう。てか俺も前世の記憶消えたから名前ないじゃん。」

そんなこんなで俺は名前を決めるのに30分かかった。

「君の名前が決まった君の名前は、くれなむ紅彩俺の名前は紅零時」

「分かりました」

そうこうで彼女は小さく頷いた。その顔は微笑んでようじに感じれた。

名前は決まつたけどこれからどうする。

俺はこれから的生活をどうするか全く考えていなかったのだ。

お問い合わせ・・・（後書き）

感想意見募集しています

ひとまず俺は自分の力の確認に入った。

最初に肉体変更だ流石にこのままだと動きににくい。想像する自分の成長した姿を

そうすると自分の体が薄く光はじめ全身光に包まれると俺は姿を変えていた大体今の体の年齢は18歳前後くらいだろう黒い着流しを着て長い黒髪が風で舞っている。

「何者かね君たちはここがグレモリー領だと分かった上での行動かね？」

いきなり声がし振り返るとそこには赤い髪の悪魔がいた。何故悪魔と分かるかと言うとこの世界の知識だら大まかな世界の話や知識が分かる最もこれから先の未来は分からぬが。

それにどうやら俺たちは赤い悪魔に不審者と思われたようだ。

「私達は怪しいものではないです。人間界で暮らしていたんですが悪魔だとばれてしまい退魔師達に殺されそうになつたところを強制転移で逃げてきたんです。強制転移の為どこに飛ばされるか分から

「ここに飛んだだと思こますこちから危害を加える氣はありませんので安心してください。すぐにここにこの領地からも出ますので」

「ナイス！彩さすが俺の従者。

「それはすまなかつた。こちらも色々とございざいに巻き込まれていねそいいえまだ名のつていなかつたねサー・ゼクス・ルシファー魔界では『紅髪の魔王^{クリムゾンサタン}』と呼ばれている」

「魔王様でしたか失礼しました私は紅彩そして主の紅零時です。あつかましいのですがもしよければ泊まれる場所に案内してもらえないでしょうか?」

「あれ?もしかして俺空氣?」

「分かつた同じ紅を名に持つものだ会つたのも何かの縁だらう私の家に招待しようではないか」

「ヤバ完全に空氣だ。それに俺無視で話決まつてはいるし。

「 むのしこのですか~ビーの馬の骨かも分からぬものを招き入れて
や~。」

「 な~に、困つたときはお互い様をそれに相達は面白やうだか~」

そんな理由で止めていいのか?

「 ありがと~びやこます。少しの間だけお世話になります」

やうして俺達は魔王さんの家にとめらひに立った。

居候（前書き）

主人公のフラグをどんどん零時は折っていきます。

それと早くも主人公最強化し始めました

少しの間こんな感じの話になります原作まではまだ先

居候

「どうも零時です。

あの後サー・ゼクスさんの好意に甘えさせてもらい今、サー・ゼクスさんの実家にいます。

現在サー・ゼクスさんの実家に居候中です、ちなみにもうかれこれ三年ほど。いやー最初は一三三日だけのはずだったんだけど居心地がよくて。

まーそんな感じで今、サー・ゼクスの妹のリアスと遊んでます。

しかし子供はかわいいですよね一年齢的には一緒なんだけじね。

そうそう、サー・ゼクスの実家にいるけど、あれから色々あって一様、蒼の魔道書とハ握剣の禁手バラフ吸イカは身に着けることが出来た。

ただ、力が強大すぎて禁手になれない、直死の魔眼と身体能力で圧得していたそれと創造神から貰った道具には一丁拳銃と日本刀が合つたどちらも能力があり拳銃のほうは玉切れなしの氷属性が刀のほうが炎属性があつた。

別に刀はあれ自身が刀だからいらないが一様使つている。

「ねー」

「なんだリアス？」

「零時は、好きな人がいるの？」

ゾク！…リアスがいつた瞬間体に冷や汗が流れた現在俺の体には彩がいるそのためうつかりナンパなんかしようものなら軟禁がまつている、現に数回ありましたから。

「いないよ」

きつとこのとき俺の声は震えていたに違いない

「だつたら将来私と結婚して」

グ！殺気が！前の日じゃないぞああ俺明日生きてかえれないは。だが俺は答えなければ子供の口約束だ

「いいよ」

そういう瞬間俺の意識はブラックアウトした。

Sideリアス

三年前私の前に運命の人気が現れた。その人を見た瞬間私は恋に落ちた。

今日、私は、零時に告白した、零時は苦笑いをしながらだけど受け入れてくれた。

でも零時が返事をした後零時の従者が影から出てきて零時を連れ去つていった。

私には分かるあの人も零時のことが好きなんだって。

でも絶対負けないから。

意見募集、誤字脱字も

どうも零時です。あの後、一週間ほどの軟禁と言つ名の監禁にあり何とか生きてかえつてこれた。

いやー外の空気がこれほどまく感じたことはなかつた。

監・・軟禁にあつた後は普通に冥界でまだ暮らしている。

サー・ゼクス（本人にそう呼べといわれた）から家を貰い今は一人暮らしきを？まー彩を数に入れたら二人なんだけど。以外にサー・ゼクスに息子がいたのが一番の驚きだつた。

そうそう、リアスだがもう少ししたら日本の学校に通うことになつた。それとサー・ゼクスにリアスのことを頼まれたナゼ？後、プレゼントでサー・ゼクスから俺も悪魔の駒を貰つた、メンバーは今の所俺以外いない、え？彩？彩は神器だからノーカウントだよ。

ま、他にもリアスの眷属（悪魔の駒）（イ・ヴィル・ピース）が増えたりした。

メンバーとしては騎士ナイトに木場祐斗、戦車ルックに搭城小猫、女王クイーンに姫島朱乃。

そして三人とも心に重い問題を抱えている木場は、どこかの研究所で聖剣の実験をさせられていて命からがら逃げていたところをリアスによつて悪魔に転生それで聖剣を憎んでいるし、搭城も猫の妖怪それも猫又と呼ばれる上級妖怪で昔姉と一緒にいたらしいが姉が主の悪魔を殺してしまい妹である塔城にも飛び火が来たらしいホントのことを言うとこのことに関しては俺は直接、触れてないから知らないが一樣出来る限り支えるつまりだ。

姫島は半堕天使で人間と墮天使との間に生まれた子供らしいそしてこの羽がいやでリ亞スに会い眷属になつた最も羽は悪魔と墮天使両方が生えてしまつたが。

こんな感じでなぜかリ亞スの眷属には色々と問題を抱えているものばかりだ。

あ、忘れていたがもう一人僧侶の眷属がいたコイツのことは・・・
・ま、察してくれ。

ちなみに俺はリ亞スの眷属ではない何でも俺も一人の悪魔としてレーテイングゲームに参加させたいらしく眷族にするともつたないというサービスのわがままでこうなつた、最もリ亞スは、納得がいかない顔をしていたがな。

そして現在俺は家で人間界に行くための準備をしているその理由

は簡単だ、悪魔の駒のメンバーを集めるつもりだからそのためリアスとは一緒に入学は出来ない、そのことで一日中文句を言われた。

文句を言われているときなぜかリアス以外に塔城と姫島がいた。

一樣、彼らも眷属になつたためリアスについていくしな。

そんな感じで俺の仲間探しが始まつた。

メンバーを探す最初に行くところは、ザ！京都！え！何でか理由は特にない気分？

そんな感じで京都に行つてきます！！

さつだ京都へ行こうーーー（前書き）

今回は話が区切つてあります。あしからず

もうだ京都へ行こう…。

ザ・京都。

そんなワケで京都にやつてきました。

イヤー さすが古きよき時代で言つのはいいね…古い建物とか特に。
「主、はしゃいでいの申しぐれりませんが先に用件を済ませ
てくれ」

「へいへい」

彩に文句を言われしぶしぶ仕事をする。今回氣分で京都に着たん
だけどついでと言わんばかりにサービスに仕事を頼まれた、その
内容が『京都に突如現れた謎の人物を捕らえろ』てことだ面倒な。

ま、サービスに旅行費を出してもうつているから文句は言えな
いんだけどな。

「それで彩、俺はどうしたらいいんだ？」

「そうですね最初に京都にいることを挨拶しにいったほうがいいのではないのですか？」

「じゃ挨拶をしに行くか…………それと出てきたらどうだ」

俺は誰もいない神社の柱に声をかける、普通に見れば『なに言つてんの？』みたいな目線が来るだろうが俺は、そこに誰かいることを確信が持てた、これも殺人技能のおかげだ気配や殺氣を探るのは、お手のものだ。

「ばれましたか」

俺が声をかけた柱から人影が現れる見た目は人だ、だが感じる。

「コイツ妖怪か、柱から現れた人物は妖氣を隠すそぶりを見せせず俺に近づいてくる。

「何者ですか？主に危害を加えるなら手加減しませんよ」

「おー怖い、怖い」

柱から出てきた人物は彩の殺氣に少し驚くがすぐ「冗談で挑発する、だがそんなことに乗るほど彩もバカじやない。

「お前は何者だ、俺達になんのようだ?」

「これは失礼した我は鶴、貴殿らが探ししているものだ」

あつけからんと俺の問いに答えて鶴、まさか俺達の目的に人物が自ら来るとはそれに向ひつけ俺達のことを知つてゐるみたいだし。

「お前の目的はなんだ? 鶴?」

「目的? 簡単だ貴殿に用があつた。あの魔王殿が認めた人物だ興味を示さんほつが可笑しいだろ?」

なるほど読めてきたぞサー・ゼクス

「そう言つことか、俺達が京都に来ることを知つてお前はサーゼクスに頼み自分を探すように言つたわけか、だがなんだ？お前の目的は？」

「全く貴殿も鈍いのさつきから言つてあるではないか！貴殿に興味があるそれだけだ、それに貴殿は、今自分の眷属を探しておるのだろうちようどよいではないか！我に力を示せー！貴殿がわが王としてふさわしければ貴殿の物になつてやろうーー。」

はー何でこんな厄介ごとが多いんだただ俺は京都でゆっくり平和に観光したかったのに。

仕方ない。俺は手で彩に下がるよつて指示を出し鶴に向かつて刃を突き出した。

「・・・覚悟じりよ鶴」

そう言つて俺は戦闘を開始する。

Side Out

Side 鶴

「・・・・・覚悟しろよ鶴」

そういうた瞬間、男の雰囲気が変わった。

最初は魔王殿に頼まれ仕方なしにこの男を見ていた。だが今は違う。今は純粹な興味、初めてだつた自分が誰かに恐怖をするのがいつも与える側だつたのに今日の前にいるものは違つた。

自然に笑みがこぼれるいつ以来だらうかこんなに戦闘で興奮するのは。

Side Out

Side三人称

キーン・カン・キーン

互いの刃が火花を散らし交わる。

零時は刀で鶴は二対の短刀で。

「ははっはははっは」 「・・・・・・・・・・・・

刃が交わるたびに鶴は歓喜の声を出すだが零時は反対に何も語らない己が刃が全てを語るよう。たゞ。

純粹な剣技では、零時が圧倒していただろうだが鶴は己が妖怪としての力妖術を使い零時を翻弄する。

鶴、サルの顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、尾はヘビで文献によつては胴体については何も書かれなかつたり、胴が虎で描かれることもある、このように鶴について明確に書かれたことはないそれが鶴の能力、対象者の意識を操り自由に幻覚を見せることが出来る。

零時も幻覚には気付いているだが、対処する方法がない。

刀で攻撃をするが致命傷は全て幻覚により外され明確なダメージを与えない。

逆に鶴は思つがままに自分の攻撃を食らわせられる。

零時は、防戦一方になりついに均衡が破られた。

「そこそこ楽しめました貴殿は強かつた、ただ我のほうが強かつた
それだけです」

それだけ言い残すと零時に止めを刺す。

そうだ京都へ行こう！－！2（前書き）

これで京都の話はおしまいです。

次回は、魔界に戻ります、たぶん・・・

Side 三 人称

「そこそこ楽しめました貴殿は強かつた、ただ我のほうが強かつた
それだけです」

その言葉とともに鶴は、零時にどぎめを刺す。

だが結果は無残にも零時の胸に刀が届くことはなかつた。

「鶴、あなたはよくがんばったなかなか強かつたぜ。だが

零時の言葉とともに零時は己が神器を発動させん。

「 これで終わりだ」

Side Out

Side 鶴

「 これで終わりだ」

その言葉と同時に奴は我に斬りかかった、だがさつきと刀が違う。

さつきまで使用していた炎の刀は、虚空に消え奴は、さつきと異なる刀を握っている。

一言で言えば無骨。

すぐに折れそうな程の細い刀。刀には、つばはなく、もつ所も白い布で巻かれているだけだ。

それだけの刀、それだけなのに我は押し負っている。

奴の力が上がったわけではない、自分が手加減しているわけではない、なのに奴の刀が我に届く。

それも的確に急所を突いてくる。

幻術が消された……否、現にしつかりと幻術は発動している。

ナセたナセたナセたナセたナセたナセたナセた

「分からぬって顔しているな、特別に教えてやるこれが俺の神器の一つハ握剣だ、能力は、いたつて簡単全てを斬るそれだけ、それだけに特化した剣だ。」

その言葉とともに刀が振るわれ意識がゆっくりと薄れていった。
だが自然と笑みがこぼれた。

Sideout

Side 零時

「むうと」

倒れるそつになる鳩を支える。そつ今まで幻術でぼやけて見えていたが今は、はつきり見える、綺麗な白い髪にそれに負けず劣らずの美貌そんなことを思つてると後ろから声が掛かる。

「お疲れ様です、主。ですがナゼ最初から神器をお使いになられなかつたのですか？」

「今回自分の身体能力を把握したかつたんだ」

ま、こじままで追い込まれるとは思つてもいなかつたけどな。それよつも・・・

「コヤシビシジョウか？」

そんなことを思ひながら、俺達は今日泊まる旅館を探しに行つた。

「 いは？」

「 いは京都のとある旅館だお偉いさんに挨拶に行つたらここを教えてくれたそれだけだ」

答えが返つてくることを期待していなかつた、だが驚きはそこではない今しがた命を懸けて戦つた者が目の前にいる。だが奴はなんでもないかのように我から視線を外した。それが酷く寂しく感じた。

「 お前これからどうする？俺を知つていたつてことは、俺の眷属になる気があるんだろううま決めるのはおまえ自身だ好きにしな」

そう奴は言い放つもちろん私の選択肢は決まつてい。

「 我は汝の矛となり楯となつ」

「我は汝の矛となり楯となひ」

よし！これでひとまず眷属が一人増える実力も申し分ないしな。

「これからよろしくだ主様」

そう言つて鶴が抱きついてきた。

そして抱きついた瞬間から彩が膨大な殺氣を放つて『殺す殺す殺す』と叫んでいた。

ま、家族が増えてよしとするか。

そう思い俺は彩をなだめることにした。

そうだ京都へ行こう！（後書き）

新しく零時の家族が増えました、何の駒にするかは今度のお楽し
みです。

それでは次の語で会いましょうう～～～～～～～

プロフィール（前書き）

どうも。

そういうえばキャラの紹介していなかつたので紹介します。

鶴についても少しだけ更新します。

それと聴きたいのですがやつぱりコアスはイッセーとくつつけた
ほうがいいですか？

それについて何か意見どうぞ…！期間は一週間ぐらい？

その間も主人公の仲間探しの話は進めていきます。

プロフィール

名前 紅 零時 くれない れいじ

顔 ブリーチの斬月と一緒に護が融合したときの顔

髪の毛を腰まで伸ばしていて後ろでくくっている。

身長 175 (通常時)

体重 平均よりやや痩せている

神器 蒼の魔道書

直死の魔眼

八握剣

能力解説

蒼の魔道書、体外にある生命力や魔力を吸収し自らの魔力に変える変換率は無限で機能を止めるまで発動され続ける、発動中は体の回りに黒いオーラが放出され腕に黒い紋様が現れ、髪も白くなる。某対人ゲームと違い腕は義手ではなく右腕に直接宿つており手の甲に小さく紋様がある。

普段は皮手袋で片手だけ隠している。

直視の魔眼、人や物の死の線が見える点は見えない。

八握剣、全てを斬るをコンセプトにしており通常時は体の中にあり、使うときになると体から出でてくる本数に制限はなく魔力がなくなるまで出せる。剣の形としては細い日本刀で柄の部分が包帯で巻

かれている

性格 めんどくさがりや、朴念仁、気配り上手、主夫

名前 紅彩 くれない さや

身長 180

体重 秘密（本人曰く）

神器 ????

性格 主命、主一筋、主の為ならなんでもする

鶴、妖魔といつての勘定記録編（前書き）

少し長くなつたので一つに区切りました多分おかしな話になつて
ますが気にしないでください

後、アンケート募集してます、リアスはイッセー、オリヰビッチ
もやつてます意見どうぞ

現在イッセー 3 オリヰ 1

Side 零時

『テウルウリーン!!

零時の眷属が新たに増えた』

「何してるんですか主?」

え?何つて某ゲームのスカウト音?多分?

「知らないのか鶴?」

「いえ」

マジー!ここでジョネレーションギャップがーー

「主、ふざけるのもいい加減にして魔界に戻りましょう。あの腐れ魔王を滅せねばなりませんから」

「うわ――。いつの間に彩」こんなに物騒になつたんだ?

「最初からです、私の行動原理は主、主、主、の三つで出来ていますから」

「す、じ、い、ねーー。臆面もなくそんなことを言ふるなんて後、心を平然と読むのはやめよ!」

「そんなことより彩、鶴に駒としての役割をあげないとな

「そうですね。彼女ならやつぱり騎士ですか?」

「確かに、彼女の剣技を考えればそうかもなでも、俺的には、戦車ルクになつて欲しいんだ」

「どうしてですか?」

「鶴と戦つたときに感じたんだが剣技はすごいが、力がなかつたの

か剣に威力がなかつた

それに、無理やり幻術を戦闘にいれている気がしたしな。

「やうですか

それだけ言つて短く領いてくれる。」うつとうとき物分りがいいと
たすかるよ。

「やうじうわけだから鶴君には戦車になつてもいい

「我が主が申されるのであれば我はそれに従つのみですから」

「ありがとう鶴」

そう言つて優しく笑つ、そつするとなぜか顔を赤らめる鶴。

「鶴、やつから氣になつっていたんだが君の名前はなんなんだ？俺
と戦つたときも名を名乗らなかつたし？それにあつたときからそつ
だつたけど、どうして君の姿がぶれて見えるんだ？」

そう、これが一番不思議に思ったことだ。

最初は戦う為、隠しているのだと思ったが、氣絶しているときも、姿がぶれて見えていた。

そのことを聞くと鶴が口を開けし空気が重くなつた、俺はただ鶴が口を開くのを待つた。

「主は、妖怪がどうやって生まれたかご存知ですか？」

沈黙から出たのはそんな短い言葉だった。

鶴、妖魔といつての苦惱後編（前書き）

どうも、じきじきでひとまず鶴のお話は終わりです。

シリアルにしようと思いましたが、主人公に会わなこと思いこし
し軽めにしました。

そして恒例？のオリ主とイッセー、リアスをビッちに入れるかで
す。

現在

イッセー 3 オリ主5となっています今週の木曜日を最後に
しますのでよろしくお願いします。

Side 鶴

「主は、妖怪がどうやって生まれたかご存知ですか？」

沈黙から出たのはそんな短い言葉だった。

「知りん……」

「え？」

我の答えにぱりりと主は斬る。

「お前がどんな存在でもお前はお前だ！ それ以上でもそれ以下でもない！」

そんな風に主は」ともなげに言ひて見せた。

我、鶴と呼ばれる妖怪に親はないどいで生まれたのか、どうやって存在しているのか分からぬ。

それが我の鶴としての存在理由。

だが主はあっさりとそれを斬った。

「自分の存在理由が欲しいのなら俺がやる。鶴！主が命じる、未來永劫我の楯となり剣となり我の側にいよ

わがままな命令だずっと側にいふ。

「全く、主はわがまだな。こんな姿の我が良いのか？」

「姿なんか関係ない。俺がお前を欲しているだけだ！」

「分かつた今ここにもつゝ一度誓つ我、鶴は未来永劫、くれなれいじ紅零時を主と認めともに未来を進むことを誓つ

誓い頭を下げる。

「よのしへ夜」

「夜？ それはなんですか？」

頭を上げ問う。

「お前が名がないといったからだ鶴は夜の鳥と書くだから夜それだけだ」

その後『単純な名だけだ』とつけたした。

初めてだった名を付けられたのはやがて呼んでもいいやつのわ。

「私もよろしくね夜

「ああ。よろしく頼む主、紅

Side Out

Side 零時

「ああ。よろしく頼む主、紅。

ナニコレって鶴改め夜は微笑んだ。

「最後だ夜お前を俺の従者として悪魔に転生せしむる

そういうと夜は黙つて俺を見る。

「そこでだーお前の姿を定着せん」

「え？」

「なに、簡単なことだ妖怪としての性さがなり、悪魔になれば多少は変えられはずだ」

「そんなこと出来るんですか？」

そう、普通は出来ない、だが神のいなに今の世界なら出来る。

「問題ない少しズルをするが」

そういうと不思議そうに首をかしげる。

「俺の従者、紅。アイツの能力を使つ。紅の能力（神器）は『ただ一つの記録』オンリー・メモリーを使うこれは、存在している概念を変える、これを使

一夜を転生させるときにもう一つ戦車の駒を使い元妖怪の鶴でなく悪魔の鶴として存在を定着させる。

鶴自体に使わないのは体が拒絶反応を起こす可能性があるからだ。

わかつたか

「????????????????」

人と通り説明するが理解できないのか頭から煙を出しショート寸前の大夜。

ま、試したほうが早いだらう。

俺は鶴の側にまで行き駒を一個取り出し、準備をする。

紅の力を借り一つの戦車の駒の概念を変える、そしてもう一つの駒を夜の前まで持つてくる。

「いべで」

俺の問いかに小さく頷く夜。

俺は戦車の駒を一つ夜にささげる、淡い光とともに鶴に悪魔の羽が生える。

そして続けざまにもう一つの悪魔の鳩として存在を定着させる駒を使う。

もう一度、淡い光が集まるが、今度はさつきと違う。

今までみえなかつた夜の姿が鮮明に見えた。褐色の肌に、金色の瞳、黒に近い紫の髪。

そして、綺麗な顔。

h h h h ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

俺はある部分を見てあることに気がつく

そんな叫びとともに夜の悪魔としての転生が終わった。

夜のプロフィールも後日出します。

補足

紅の能力は概念を変える能力ですが概念一つにじつき一つ変えることが出来ます。

ちなみに概念であればなんでも変えることが出来ます。

あとオリジナルの神器も募集します、作者の貧困な頭をお救いください。

それではさよなら。

王はいつも死の危機？（前書き）

こんにちは、今日は、スピノフです。

零時が彩に監禁、もとい軟禁されかけのお話です。

そして明日までになりましたリアスはオリ主、イッセイ一派から投票お待ちしています。

現在

オリ主 8 イッセイ 5

投票してくれたかたは、ありがとうございます。

では次のお話で。

主はいつも死の危機？

「あのー彩俺は何でベシトに括り付けられているんでしょうか?」

しかも鎖。

「主、私も本当は」んなことはしたくないんです」

なるあるなよ。

「ですが、主があまりにも見境なく女人を誘惑するので少し。
h a n a s . i をしようと思いまして」

「待てー！」彼のビービーがお話だー。ビービー見ても何かする気満々だろ？がーーー！」

「いえ。男で言ひ拳で語り合ひのところです。テヘ

は？何言ひてんの？ビリ見てもワンサイドゲームじゃねいか！しかもテヘ ジヤね——————

「ま、彩何があつたんだ?話しひがひ、本物に話しひがひじやないと零時さん死んじゅうかりー。」

「ダメです」

ヘルプ！ヘルプ！彩さん目に光が灯つてないから――――――

ちよつこつちに来ないで死ぬ死ぬ

ガチヤ

h
?

「零時一遊びに来たよ！」

おおーー 我がメシアよ良くぞ來た。

俺を頼むじうか助けてくれ。

「何してこるの？零時？」

「これはこれは、主に迷惑を掛けばっかりの小娘、リアス様ではないですか」

「ちよい待つて！何、喧嘩売るよつな」と叫つてんの。

「じうも愚図従者」

「そしてリアス、君も買ひつな！！」

私の命が――――

「なんですか？小娘様？」これから私は主と樂しい会話をしないといけないんですけど？」

「会話？笑わせないで零時が嫌がつてゐるぢやないそんなことも分からないの？」

にりみ合つ一人そして・・・

ボソ

「貧乳小娘」

「逝かれ従者」

ブチ

あ。なにかすごい危険な音がしたよ。

そしてリアス、君は僕を救ってくれるんじゃなかつたのか。

そんな俺の考えをよそに一人は喧嘩を始めた。

え！

俺、オンザベット。

現状縛りつけ（鎖）

あ。死んだ。

そんな俺のむなしい考えは、一人の喧嘩とともに綺麗に消えた。

文字どり綺麗に。

「主、では約束の○ h a n a s . i をしめしょつ」

「大丈夫です。いたいのは一瞬ですから」

「ヘルプ、ヘ『ガツ』バタ

「わざわざくつと体に。 hanas. いをしまじょうか」

俺はこの後どうなったか知らない、聞きたくもないただ俺は自分の無事を感謝した。

主はいつも死の危機？（後書き）

無事帰宅？（前書き）

投票結果発表

オリ主9 イッセー5 よつてリアスはオリ主のハーレムに行きます。
パチパチ！！

そして今回は、やつと零時は自分の家に戻ろうとします。

そして新たな敵しゅつげん？

無事帰宅？

Side零時

「 ？」

俺達は本来ならば転移魔方陣で自宅の前にいるはずだ。

だが現状は著しく異なつていて。

自分の視界の中に家はなく、謎の不気味な城がある。

「夜、彩、いつでも動けるようにしておけ」

一人にいつでも動けるように声をかけ再度、あたりを観察する。

枯れ果てた大地、不気味な城、赤い空、全てが異形と呼べる場所に俺達はいる。

「ん？」

あたりを見ていると城の前に誰かが現れた。

夜と彩は警戒を強め城の前に現れた者を見据える。

「お待ちしておつました。私は、この城で従者をしていろ者です」

そう言つて彼女は礼儀正しく頭を下げた。

「貴様の主とやらが我が主を呼び寄せたのか?」

夜は殺氣を放ちながら城の従者に問つ。

いやいやいや。確かにそれも気になりますよ夜。だけでも一もつと気になるところがあるでしょう。

「はい」とひづけ

「せうか」

え！ それだけなんで彼女の格好を聞かないの？

まだ。百歩譲ってメイド服なら納得しよう。

だが！ 何で彼女はナース服なんだ…！ しかもかなりにあつているし。

「主、気にする」とはありません、よろしければ私、彩が着てあげますので（二二七）」

何言つてくれてんの？ 誰もナース服が良いなんて言つてないそもそも何でナース服を着ているか知りたいだけだし。

「はーもつ良いよさつとこいつか

「では」案内します。ついてきてください

そう言つて歩くナース服の従者の後を俺達はついていく。

しかし、違和感がある。

俺は彼女を観察したが可笑しい彼女からは、生命の流れを感じない。

人も悪魔も天使も生きているそしてたとえ神器だろうと微量ながら生命の流がある、だが彼女にはそれがない。

それどころか魔力、氣すらも無い、感じ無い、まるで最初から存在していないかのように。

また彼女の見た目にも氣になる点が多い、死人のように白い肌、浮き出でていない血管、白髪がほとんどのくすんだ金髪。

そんな見た目に俺は一つの答えを自分で導き出した。

彼女は生きていない、そして死んでいない

生きる死体『人造人間』

そう俺は答えを出した、そしてこの考えが俺の未来を左右することになるかも知れぬことにまだ俺は気付くことはなかった。

館の主と従者（前書き）

今回ナースの存在が明らかのそして主、登場！！彼女の目的は？

館の主と従者

Side 零時

ナース服を着た奇妙なメイド？従者？に城の中を案内された俺達は、大広間のような所で城の主と対面している。

しかし面倒だ、ナゼ椅子がない？このまま立ちばかり！

「よく来た、歓迎する。私はこの城の主、プラン・W・ノワール。道案内をしたのが私の従者だ」

そう言つてこの城の主プランは自己紹介をしてきた。

プラント名乗つた奴の見た目は、まー普通に美人かな？美人と言うよりは美男子よりの顔に透き通つた肌、銀色の短髪、青色の瞳そして俺が女だと分かつた最大の理由それは！

服装だ、明らかに男を挑発するような格好をしている、白を主体とした服は、胸元は大きく開き頭を下げるときが大きく揺れる。下に視線を移すと体のラインがはつきりと見えるひちひちのズボン。

男だつたら泣いて喜ぶだろ？だが俺の両サイドには修羅と般若がいる。胸元を見た瞬間一人からほぼ同時に目潰しを喰らいかけたしな。

「知つてゐようだが一樣名乗つておこつ。紅零時だ。^{くれなれいじ}両サイドにい

るのが俺の従者、俺から向かって右が紅彩くれいろ

礼儀にのつとり俺も返す。だが視線は逸らす、隣にいる修羅と般若に何をされるか分からぬからな。

「まずは無理やつこの城に呼んだことを謝ろう

」さう言ってプランは頭を下げた。

「ああ、別にいいよ、で用件は？わざわざ俺達の転移用魔方陣に干渉までしてきたんだ、俺達を呼んだ理由を教えて」

「そうだな、零時お前を呼んだのは他でもない私と私の従者を殺してくれるよう君に頼みたいんだ」

「は？」

「まて、これは俺の聞き間違いか？」

「突然のことで悪いと思うがこれ以外私達が運命から逃れるすべはないんだ！頼む私達を殺してくれ！」

懇願、涙を流しながら田の前のブランは頭を下げる従者はそれに寄り添つように主の側による。

「悪いが理由を話してくれ突然そんなことを言われて申し訳もないからな」

俺がやつと言つとブランは小さく頷き自分のこと、自分の従者のことを話し始めた。

「私は、魔女だ。人の身でありながら強大な力を見に宿してしまった。そして滅びた魔女唯一の生き残りだ。

私はこれでも何世紀も生きている。その理由がこれだ」

そう言ってブランは自分の胸に手をやり何か呪文を唱えるそうするとブランの胸の周りが光ると同士に時計が出てきた。

時計は、ブランの胸より少し上に現れ今はブランの体と一つになつて胸元の所にくつ付いている。時計はローマ数字で刻まれ小さいながらも神々しさを放つている。

「これは？」

俺は思わずブランに聞いてしまつた、隣にいる俺の従者達も不思議そうにしている。

「これは私に宿っている神器、灰かぶり（シンテレラ）能力は時間を24時間前に戻すこと。

そしてこの力は一日一回強制的に自分に効果が発動させられる、その所為で私はこの若若し姿を保つたまま。

もう嫌な大切な人が死ぬのも、誰かに忘れられるのも、だから私を殺してくれ零時」

なるほどな。

「あなたの理由はわかつた、だがプランあなたの従者はナゼ殺さなければいけない？」

「彼女も私と同じような理由だ。

はるか昔、まだここに城を構える前の頃だ、たまたま寄った国そこでは、酷い疫病がはやつていてな、私は問題なかつたがそこに住んでいる人々をどんどん死んでいった、それを食い止める為私の従者の父があることを思いついた、それは元気な人間に病原菌を射ちそこからワクチンを作ろうとした、そこで実験台になつたのが実の娘だったわけだ」

ギュ

その言葉を聞いた瞬間怒りが湧き上がる。

「いいのです、零時さん、村で唯一元気だつたのが私だけでしたか

俺の表情を見て思ったのか彼女は苦々しく笑う。

「それでも結局ワクチンは作れませんでしたし

え？

「じゃなんで君は今ここにいるんだ死んでいるだろう普通

「そうですね結局ワクチンは作れませんでした

『その段階では』と彼女はつけたして。

「その後、私にあることが施されましたそれがいま私が存在している理由です。

ワクチンが出来ず、自分の所為で娘の命を奪いかけている、そう思つた父は私を

生きる死体『人造人間』になるよう施しました。

人造人間になつた私は死ななくなり不老不死になりました、そして不老不死になつた私を使ひ父は、ワクチンを作り村人を救いました。

その後は、不老不死になつた私を氣味悪がり恐怖した村人に追い出された時主が拾つてくださいましたそして長い年月をえて今に至ります」

そして、最後に一人そろつて俺に殺してくださいと言つた。

館の主と従者（後書き）

どうも今回の話は自分の好きなマンガを参考にしました、まかぶ
つたが気にしないそれでは火曜日に――――――――――――――――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892w/>

ハイスクールD×D平和を望む少年

2011年10月9日21時14分発行